

福東城跡

- 所在地 福東城浦（揖斐川河川敷）
- 指定年月日 町指定 史跡 昭和32年9月3日
- 時代 江戸時代

福東は川の利用が重要な時代には、交通の要所であった。現在の船付、栗笠、烏江は三湊と呼ばれ、牧田川に沿った舟の発着地である。このあたりは舟運の便がよく、物資や人びととの集散繁く賑わうところだった。

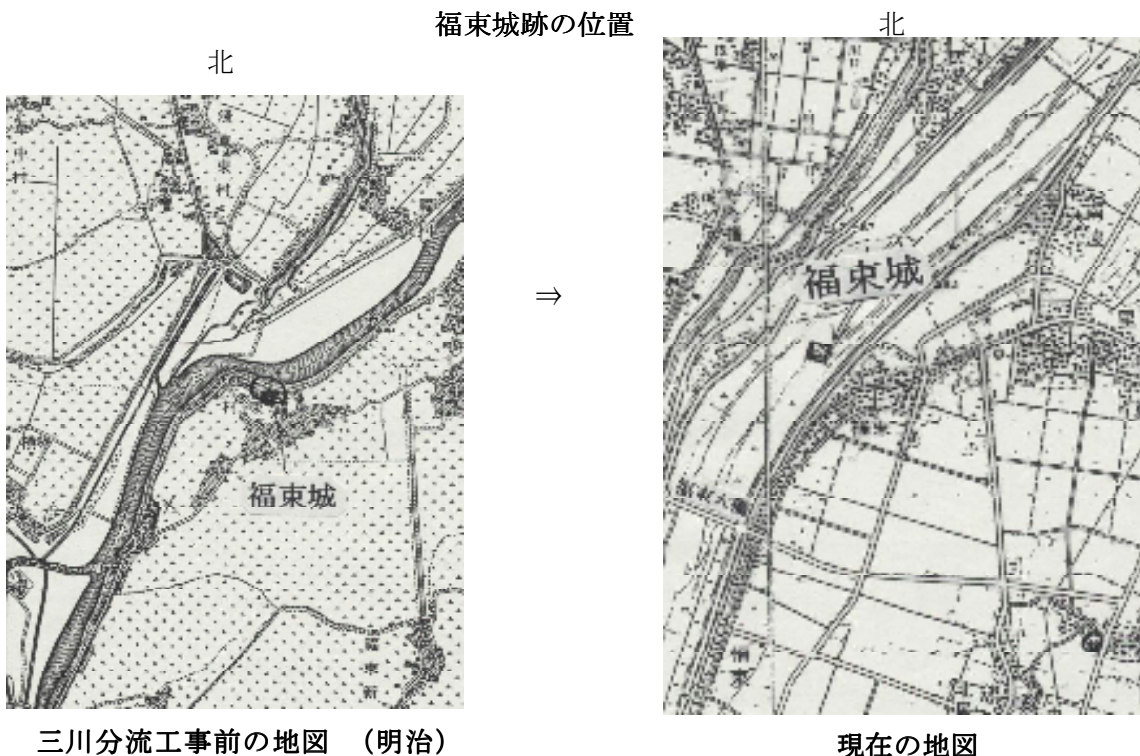
福東城跡は、明治33年の木曾・長良・揖斐の三川分流工事によって跡形は全く失った。里伝によると改修工事以前は、老楓の下に小さな祠ほごらがあって、わずかに城跡の名残をとどめていたという。その位置は、揖斐川の城浦渡場とその南の鎮所の端を結んだ線の川の中央あたりだったようである。

美濃国諸旧記に福東城は応永21年（1414）9月、土岐氏の家臣であった福東蔵人十郎益行が築城して南伊勢との船運を取仕切っていた。その後、正長元年（1428）に丸毛光慶が居城し、以来代々丸毛氏がついだと書いている。丸毛氏は代々2万石の小大名であるが、西濃での有数の実力者であった。

慶長5年（1600）の関ヶ原合戦のとき、福東城主丸毛兼利は、東軍の福島正則たちのさそいがあったが断り、石田三成の西軍に加わった。8月16日、大藪村、大樽村に西軍の援軍とともに陣を置いて、東軍の今尾城城主の市橋長勝、松ノ木城主徳永寿昌の軍と大樽川をはさんでにらみ合いをしたが、夜になって市橋軍の一隊が楡俣、十連坊へ忍び込み村人を味方につけ、火の手をあげたため、丸毛軍は、こらえきれなくなり、福東城をすて17日になって大垣城へ落ちていった。以後は城主なく、断絶した。

福東城には、市橋長勝が入り、関ヶ原合戦の東軍勝利のため働いた。丸毛軍が、徳川方と激しく戦った大藪地区では、戦いで死んだ人や傷ついた人がいた。東大藪の北塚は、その時の戦死者を葬ったところといわれている。丸毛兼利は、関ヶ原合戦後、加賀の国へ落ちていき、病死したといわれているがはっきりしない。

福東城跡の位置



三川分流工事前の地図（明治）

現在の地図

